ュニティが生まれた。

戦乱の収まった江戸時代には，商工業が様々に発達し産業文化が形成された。京都においても公家や幕府から注文を受けて帯や呉服など和装を中心とする様々な伝統産業が発達する中で，建築技術・工法も発達し，庶民の住宅でも大きな架構が可能となった。一方，産業の発達に伴って庶民の生活水準も向上し，瓦や畳の使用が一般的になり，商家でも畳敷きの大広間のある京町家に居住するようになり，その空間に客を招いて茶会や句会などを催すようになった。さらに，そうした会合において，広間をぐるりと囲う客をもてなすため，特に，座敷の真ん中で接客する主人の背中側に座る客に対する配慮として，背中に大きな飾り結びを付けた幅広の帯が商品開発され，それがお茶，お花の文化とともに全国に普及し，町衆は大きな利益をあげた。更に，その利益が京町家などに再投資され，畳や桟瓦が普及し，都市居住文化の花が開いていった。

そうした都の発展とともに人口が増大し，立派な大店の建設需要や，庶民住宅である長屋などの建設需要の高まりは，建築工事の標準化，規格化を促し，畳や建具の寸法が統一され，共通の寸法体系による統一感のある建築意匠を形成し，今日の京町家の原型を形成した。

また，財力を蓄えた商家においては，構造材や仕上げ材に全国各地の銘木を調達するとともに，それに見合う技能を要求することにより大工・職人の技能が向上し，華奢で洗練された今日の京町家ができあがった。当時，京の大棟梁であった中井家の下に２２の棟梁がそれぞれ地域を分担しており，互いに切磋琢磨して技能の向上に取り組んでいた。また，主要な商家はこうした職人のパトロンであり，棟梁が抱える職人が生活することができるように仕事を出していた。新築工事よりも出入りの大工として日常の維持修繕が主な仕事であり，請負契約というより雇用契約に近い形で，強いつながりを持っていたとされる。このため，暮れには職人を引き連れて大掃除に取り組み，日ごろは手入れがしにくい吹き抜け空間の梁の上の埃払いや，中庭の白砂の磨きなどに取り組んでいた。今日でも，こうした仕組みは町場大工を中心に残されており，代々のお付き合いのある京町家の維持管理に携わるとともに，祇園祭の山鉾の組み立てにも参加をしている。

その後，時代とともに京町家の姿も少しずつ変化を繰り返した。今日見られる京町家は近世に成立したとされている。

しかしながら，その様式は一様ではなく，地域やその店の商売により様々な特徴を持っている。たとえば「上の京」の織物の町，西陣に見られる「織屋建て」は，建物の奥にせいの高い織機を置くため，天井の高い吹き抜け空間を有しており，商人のまちであった「下の京」の比較的規模の大きい商家に見られる「表家造り」は，表の商いの空間と奥の生活空間はそれぞれ別々の棟で構成され，その間を玄関棟で繋ぐことにより，奥の間の独立性を高め，客の接遇などに活用していた。さらに，花街の茶屋などの様式である「茶屋様式」は，２階を接客空間として活用するため，２階の壁面を通り庇の上に張り出して設けている。

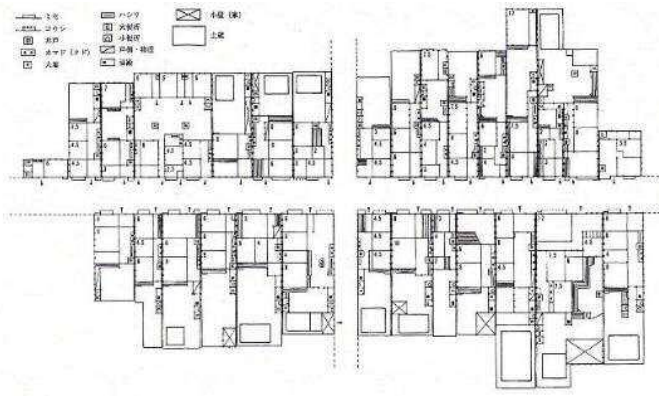

図 2-29　京都の町内における家々の間取りと設備

出典 「日本都市史入門Ⅰ空間」高橋康夫・吉田伸之　編　東京大学出版会 1989 年
近世京都の町並-文化５年, 指物屋町-小川保

図2-30　三条油小路町西側町並絵巻【部分】

京都府立総合資料館　所蔵

※文政３年（１８２０）に描かれた絵巻